

山梨県立甲府西高等学校

創立120周年記念誌

The 120th anniversary memories

永^{とこ}久^{しえ}か
けて
称^{たた}え
なん



称^{たた}えなん
永^{とこ}久^{しえ}かけて

山梨県立甲府西高等学校
創立120周年記念誌
The 120th anniversary memories



山梨県立甲府西高等学校 校長

高見澤 圭一

あいさつ

創立120周年記念誌が多くの皆様のご協力のもと、こうして発刊できることを大変喜びに感じております。

本記念誌では、大正7年に本校の前身である山梨県立高等女学校を卒業後、医師として主にハンセン病の治療に従事された小川正子氏の紹介をはじめ、幅広い年代の同窓生に高校時代の思い出や西高への思いを語っていただいた座談会の様子、卒業後にそれぞれの立場で活躍してきておられる同窓生の寄稿などを中心に編集しております。本誌を手元に、120年の歴史の中での、皆様の西高への思いを新たにしていきたいと思えます。

さて、現在は、少子化に伴う人口減少社会への対応、人工知能の進展をはじめとする高度情報社会への対応、「地球沸騰化」と表現されるに至った地球環境問題への対応など、定まった正解のない課題への取り組みが、身近な生活の様々な場面で求められる時代となっています。

教育界においても、新学習指導要領のもとで令和の日本型学校教育の構築への取り組みが行われており、国において「急激に変化する時代の中で育むべき資質・能力として、一人ひとりの生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の

創り手となることができるようにすることが必要」と示されています。このことは教育の普遍的な役割であるとはいえ、本校が120年を越える長い歴史の中で絶え間なく積み上げてきた姿と重なるものであります。

本校ではこの10年間で、マイクロソフト社との連携によるICT教育の推進にいち早く取り組み、新型コロナウイルス感染症に対応した学びにもスムーズに移行することができました。また、平成31年4月に国際バカロレア校として認定を受け、高次の探究過程での課題解決力や国際的視野等の育成に取り組んでいます。これに併せ、全校生徒が課題研究論文に取り組みなど課題探究にも力を入れています。

こうした中、このたび、120周年記念事業として書道室等特別教室へのエアコン設置、学習スペースの整備など学習環境を改善していただき、学校としての取組みや生徒の学びの充実に大いに役立っております。この場をお借りして改めて、感謝申し上げます。これからも本校は、輝かしい歴史と伝統を受け継ぎながら、甲府西高校で学ぶ生徒たちが次代を担う力を身に付け社会で活躍できるよう育んで参ります。

終わりに、本記念誌の発刊にあたり、ご尽力ご協力いただきました関係者の皆様に深く感謝申し上げます、ご挨拶とさせていただきます。



山梨県立甲府西高等学校 同窓会長

石原 敬彦

自由で伸び伸びとした校風 そして 品格

私が入学したのは、昭和五〇年四月、甲府二高が新たに総合選抜校となった年でした。二高で入学し、西高で卒業いたしました。

二年生の六月に生徒会長となり、最初の仕事が九月の鳳凰祭でした。「本当にやりたい事ができる学園祭」というコンセプトを掲げ、「一番やりたいことは何か」全校生徒にアンケートを実施しました。圧倒的多数を占めた要望は、それまでにはなかった「模擬店」でした。早速、生徒会顧問の内海先生のところをお願いに行きました。先生方にとっては、唐突で短絡的な要請であったと思います。すぐに許可はいただけませんでした。企画には飲食を伴う模擬店も複数あったため、許可をいただくために職員室に何度も通いながら、実現は難しいとも思ったりしました。しかし、ある日、突然許可はおりました。「あとは君たちに任せる。しっかりと頼む」それがその時の内海先生の言葉でした。

三年生の六月、土曜日の午後に体育館を借りて軽音楽同好会の仲間たちとフォークロックのコンサートを行った時のことです。出演希望者が増えて終了時間が、申請した時間よりも三時間もオーバーしてしまいました。私は責任者でした。終わった時、職員室で一人、待っていて下さったのも内海先生でした。先生は、体育館まで来てくださり、一緒に最後の施錠をしてくださりました。説諭されることを予想していましたが、一言だけ、「石原、時にはクールになることも必要だ」とおっしゃいました。先生の茨城弁の温かいアクセントと手に下げていらつしゃった風呂敷包み、それに暗くなり始めた空の色を今でも覚えていきます。

あの頃、母校西高の先生方は私たちをたくさん現場で「信じて任せて」くださいました。そして、時に心配な状況になっても、待つてくださり、最後まで温かく見守ってくださいました。西高は「自由で伸び伸びとした校風」と言われますが、その根底には女学校時代からの先生方の生徒への強い信頼があるのだと思っています。

そして、先生方は、勉強面では大変厳しい「師」でもありました。宿題はたくさん出しました。朝のホームルームの前に一時間、帰りのホームルームの後にも一時間、課外と呼ばれる授業がありました。夏休みには八ヶ岳の寮に宿泊する林間学校があり、楽しいことを期待して参加すると、実際には、日中は六時間授業を受けて、その後は自主学習、結局一日中勉強するという合宿でした。個人の指導も手厚かったです。数学の山本克英先生は、「朝七時には学校に来ているから質問に来なさい」とおっしゃって早朝の職員室でいつも待つていてくださいました。私は身延線の早い電車で通学していたので、何度も質問に行きました。また、英語の道に進みたいと思

いながら、成績が伸び悩んでいた私に、声をかけてくださり、英語の勉強方法を教え、一カ月間にわたって毎日個人指導をしてくださったのは加藤正明先生でした。授業の中で予習をしないかった私を指名し、「石原が予習なしでやっていく実力があるとは思えない」と厳しく叱つてくださったのも加藤先生でした。おかげで私は、英文科に進み、中学校の英語教師になることができました。

縁あって、卒業と同時に同窓会の理事となり、以来今日まで同窓会に関わらせていただけてきましたが、その中で先輩方との数々の素晴らしい出会いに恵まれました。同窓会の先輩方からはとにかく「品格」を感じてきました。そして、この「品格」は、実はお世話になった先生方からも同様に感じていたものであり、西高という学校の大きな魅力ではないかと感じるようになりました。

甲府西高は、百二十年という歴史の中でその創立から幾多の変遷を重ねながら、たゆまぬ進化と発展を続けて来た学校と言えます。そこには常に時代を先取りする叡智がありました。しかし、その叡智の具現化には、関わる人々の個性と相互の関係性が不可欠です。それまでにはない、新しい何かが提案された時、先に進んでいくためには、提案した人への信頼が必要であり、また初めからすべてがうまくいかなくても寛容に柔軟に受け止め、協力や支援を惜しみなく続けていく決意も必要になります。そこからは、「信じたものが生まれまします。叡智と常に変化を受け入れる寛容で柔軟な精神、そして、関わり合う人々の相互の信頼が、これまでの西高を築いてきたのではないのでしょうか。そして、「品格」はその中で醸成されてきたのだと思います。

私が生徒会長になり、革命家を気取って生意気だった時も、前会長の飯島敬子先輩は本当にやさしく接してくださいました。礼節を欠いていた私を認め、志した変革を後押ししてくださいました。先生方も同様でした。また当時の同窓会長の鈴木勢津子先生は、顧問さんになられた後も理事会では必ず若い私のところに来てくださり「あなた、よろしくはたしますよ」とお声をかけてくださいました。今こうして振り返ってみますと、私は母校西高で、高い教養と確固とした信念を持ちながら、同時に寛容で優しく、温かいたくさんの人たちと出会い、支えられてきたのだと改めて思います。

これまでの数々の出会いに感謝し、母校甲府西高が百二十年の長い歴史の中で育まれてきた「品格」をこれからも持ち続けながら、さらに発展してゆくことを心より願つてやみません。



山梨県立甲府西高等学校 PTA会長

山岸和仁

創立120周年を迎えて

甲府西高等学校が創立120周年の慶事を迎えられましたこと、心よりお慶び申し上げます。

また、この節目の時に関わらせて頂くことを大変光栄に感じており、PTAを代表して大変うれしく思っております。

甲府西高等学校は高等女学校からの、長い歴史の中でその時代の時代の要請に応えながら、個性と創造性に溢れ、教育目標「自己を知り 自己を深める」のもと、心身共に健やかな生徒の育成に取り組んで来られました。

このような素晴らしい伝統の下、県内でも引けを取らない校風の中で学べることは、生徒とその保護者にとって、心のよりどころとなっております。これも一重に歴代校長先生を始め、教職員の皆様方の愛情と熱意のある教育姿勢が脈々と受け継がれてきた事、さらには地域の皆様方の暖かいご支援ご協力の賜物であると、あらためて感謝申し上げます。次第です。

現在私は、PTA会長のお役目を頂き、折学校に足を運ぶ機会が増え、中庭の銅像「大空」を見るたびに思い出されます。

私ごとですが、40年前、創立80周年記念の年、本校の在校生であり、金田一春彦教授の記念講演やポニージャックスの記念音楽会等盛大に行なわれた事を覚えています。

当時1学年9クラス、1,200人を超え

る生徒で盛り上がりました。

今では生徒の数こそ変わりましたが、県内で最も早く単位制を導入し、国際バカロレアやICTの活用など時代の変化に対応した教育活動を展開しています。

公立高校でありながら、特色ある教育を打ち出すのは、時には難しいこともあるかもしれませんが、強い思いで、ご自分たちが信じる教育を実現されている校長先生はじめ教職員の皆様には、頭が下がる思いです。改めてお礼を申し上げます。

どうかこの先も、子供達の健やかな成長と勉強の場として益々の発展をされ、130年、140年と歴史を積み重ねていかれることを願っております。

この節目の時を契機として、学校・家庭・同窓会・地域の皆様で協力し、今後の甲府西高校のより良き道筋を導いていく事が不可欠では無いでしょうか。やがて、巣立っていく子供達に未来への思いを繋いでいく形を表すのが、筋目の記念事業の役割なのだと思います。

今日まで本校にかかわってこられた全ての方々の思いが、歴史と伝統を引き継ぎ、ますますの更なる発展と大きく飛躍されることを心より祈念いたしました。お祝いの言葉に代えさせていただきます。

120周年記念、誠におめでとございます。



山梨県立甲府西高等学校 生徒会会長

姫野 爽士

困難を乗り越えて

私たちが学ぶこの甲府西高等学校。その歴史は遂に120周年を迎えました。

この節目を迎え、120周年という歴史が、これまで長きにわたって諸先生方や西高で学び卒業していった先輩方により培われたものであると改めて実感するとともに、この記念すべき年に籍を置けたことを喜ばしく思います。

ここ数年、私たちは西高の伝統が絶たれそうになる経験をしました。それは、新型コロナウイルス感染症の影響で、入学式や卒業式を初めとした学校行事は軒並み中止、日々の授業や部活動ですらままならない日々が続きました。その影響は私たちにとってあまりに大きく、そのような状況を経験して、初めて「何気ない日常は当たり前ではない」ということを痛感しました。

特に問題となったことは、伝統の継承です。中でも、本校の代名詞とも言える鳳凰祭は、過去の先輩方が繋いできた伝統の賜物であり絶やす訳にはいきません。

当時の先輩方は、どうにか出来ることを模索し、沢山の制限の中でもしつかりと後世へ伝統を繋いでくれました。コロナ禍が始まって3年経った今年、そのバトンを受け継いだ私たちは、多少の制限はありながらも一般公開や出店の再開などほとんど従来の鳳凰祭に近い形での実施にたどり着くことが出来ました。

鳳凰祭以外でも、たくさんの中でコロナ禍以前の活気を取り戻しつつあります。現在、西高には581名の生徒が在籍しており、それぞれが学習にも部活動を始めた課外活動にも懸命に取り組んでいます。その成果は進路実績や、部活動の関東大会をはじめとした上位大会、全国高等学校総合文化祭などの出場といった形で現れています。

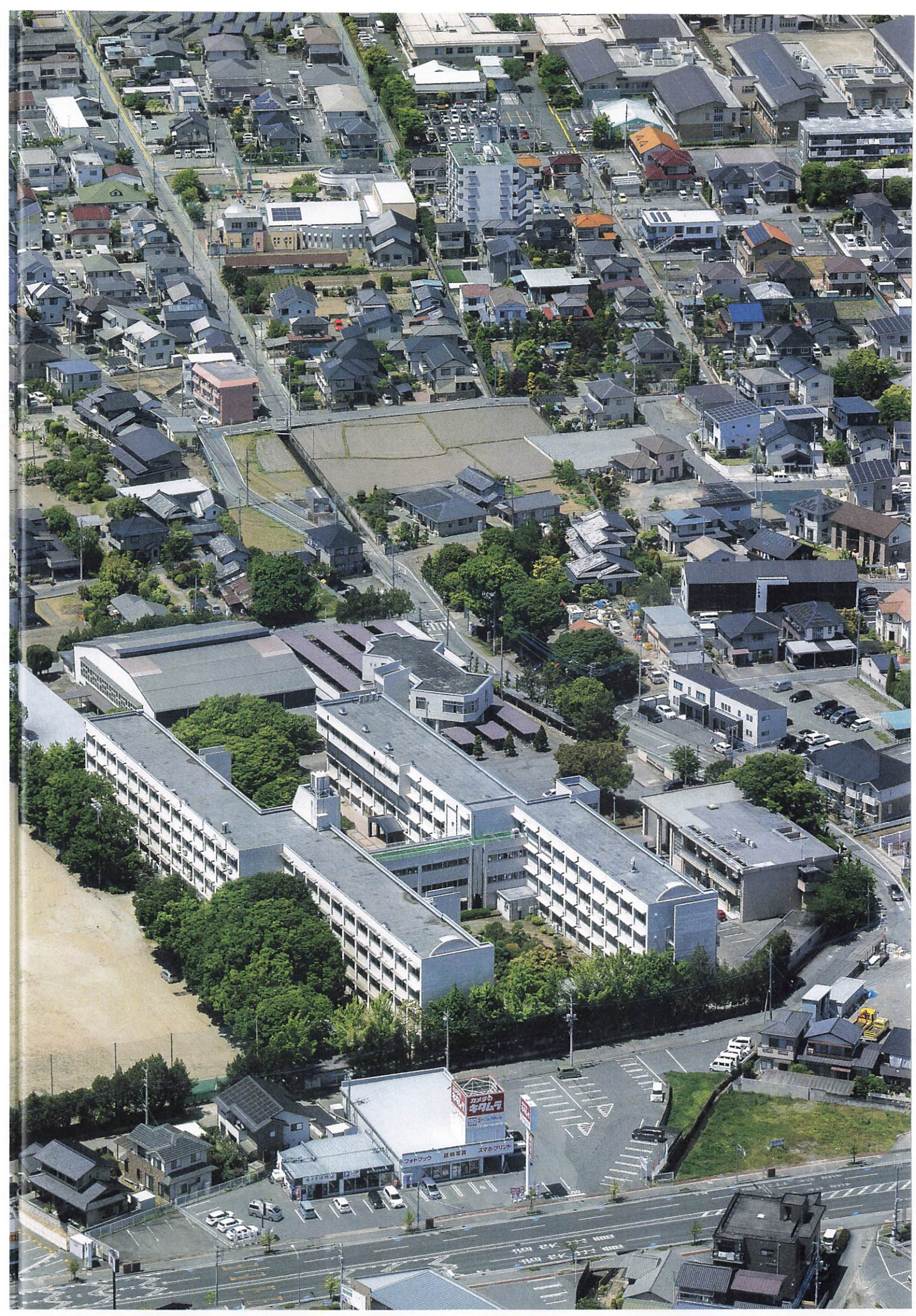
また、私たちの学校生活を支えて下さる先生方は、学習指導や部活動の指導にとっても熱心であり、先生方の熱い授業は一生心に残り続けること間違いありません。毎年行われている球技大会や体育祭では、先生方も積極的に参加して下さい、大いに盛り上がりました。

現在、私たちがこのように充実した学校生活を送ることが出来るのも、同窓会の皆様、PTAの皆様、諸先生方、西高に関わって下さる多くの方々のおかげであることを深く感謝していると同時に、この度120周年を記念して沢山のご支援を賜り、厚く御礼申し上げます。

こうした一つ一つに皆様の西高に寄せる期待の大きさと想いの深さを感じ、私たちはこれから学校生活に精一杯取り組んでいかなければならないと心を新たにしています。私たちは、この伝統ある甲府西高校で学べる喜びと誇りを胸に、さらに素晴らしい学校となるよう日々努力していきたいと思えます。

学校長挨拶	2
同窓会長挨拶	3
PTA会長挨拶	4
生徒会長挨拶	5
校歌・応援歌	8
特集「小川正子の生涯」	12
寄稿文	16
120年刻まれた時	17
同窓生座談会	37
「N. stage」で西高を振り返る	45
創立120周年記念式典	62
創立120周年記念講演会	66
編集後記	68





山梨県立甲府第二高等学校
山梨県立甲府西高等学校

校歌

作詞 尾崎 喜八
作曲 平井康三郎

- 一 立ちならぶ四方の山々
めぐり出る豊の流れに
美はしや甲斐の国中
歴史古る大京都よ
ここにして母校のいらか
玉の窓空に映えたり
- 二 身は鍛へ心清めつ
いや深く学を修めて
世の幸と国の栄に
つくさなむ高き理想よ
その夢のうつつの姿
まなかひの富士に見るかな
峡深く結ぶ粗玉
- 三 磨かづば光あらじな
秀づべき資性のさまざま
生ひ立たす愛の母校よ
称へなむとこしへかけて
甲府なるわが西高
〔第二高校〕



山梨県立高等女学校
山梨県立甲府高等女学校

校歌

作詞 本多亀三
作曲 三谷良太

- 一 底つ岩根に真木柱
太しき立てし学び舎の
庭に皇恩の露繁く
育つ我等ぞ 幸多き
- 二 皇国の鎮と峙ちて
千代に動かぬ富士の嶺の
靈しき姿を仰ぎつゝ
節操の心 高めなむ
皇国に無雙勝景なる
金溪をしのぶ荒川の
清き流れを鑑とし
貞淑の心 磨かなむ
未だ二葉なる姫小松
教への雨にうるほひて
春立つ毎に色を添へ
栄えゆくこそめでたけれ
- 三
- 四

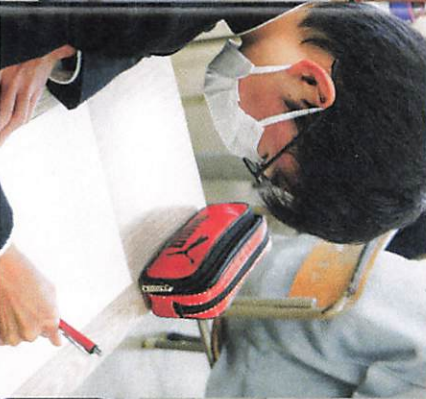
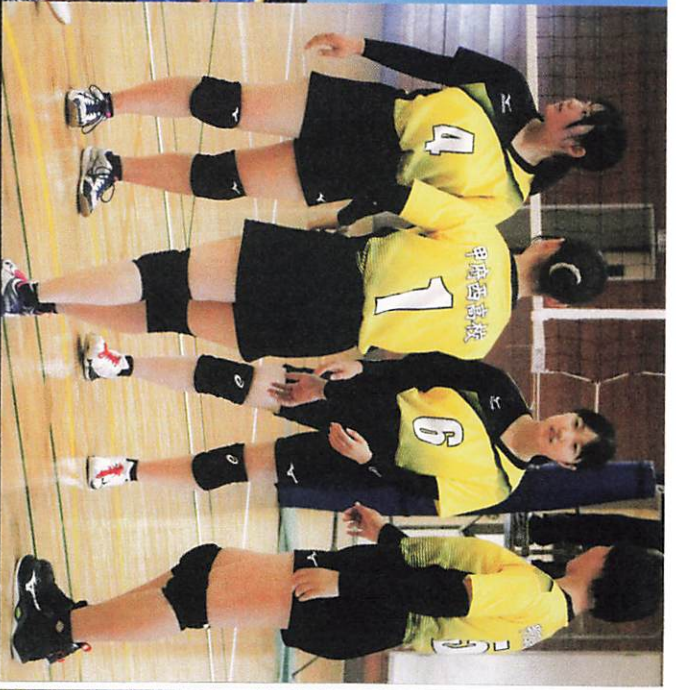
応援歌「おお我が選手」

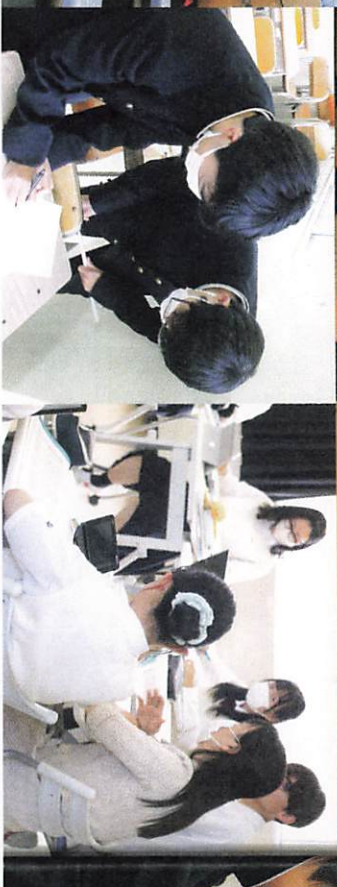
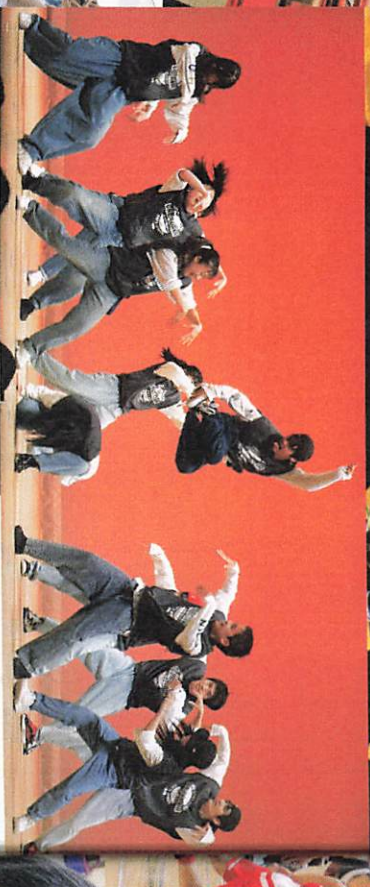
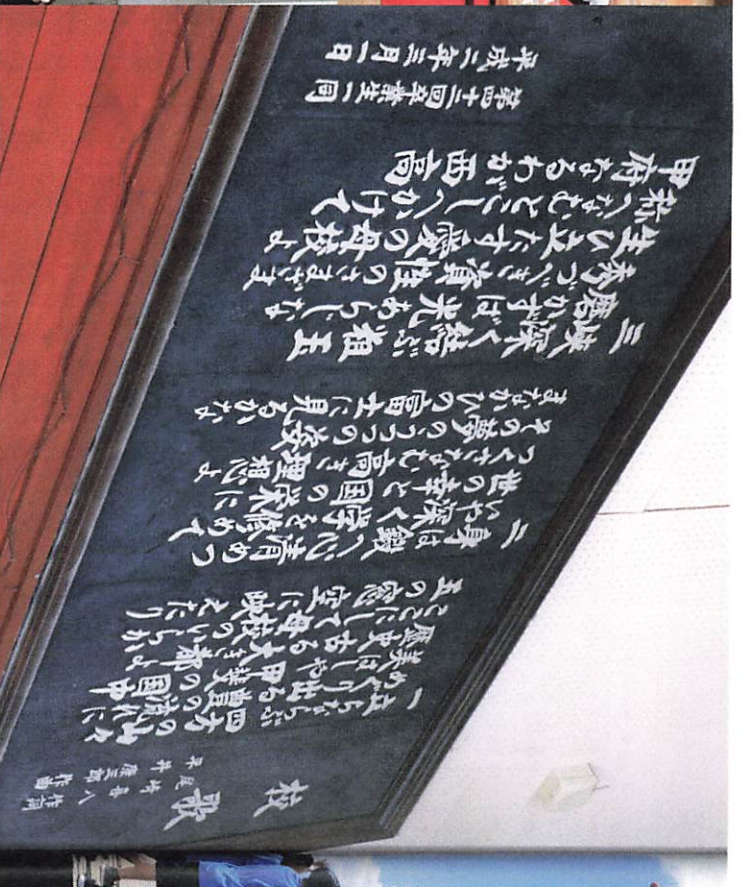
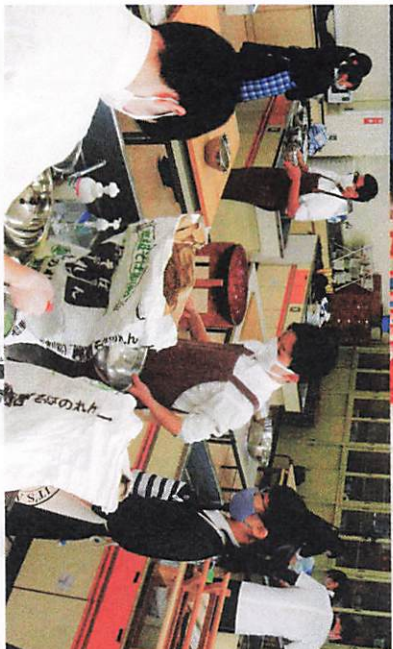
作詞 松谷達男
作曲 井上たか

- 一、おお精銳の 我が選手
走れ 飛べ 投げよ
光輝ある母校の歴史を負うて
堂々と 正々と 力のかぎり
若人の意気と熱もて
いざや 征け
ふるえ ふるえ 西高 甲府西高
- 二、おお俊秀の 我が選手
泳げ 打て 躍ねよ
光輝ある母校の歴史を負うて
鍛えこし そのわざの
すべてをここに
スポーツの精神をもて
いざや 征け
ふるえ ふるえ 西高 甲府西高
- 三、おお勇壯の 我が選手
謳え その いのち
光輝ある母校の歴史を負うて
さっそうと
澁刺と瞳あかるく
青春の その誇りもて
いざや 征け
ふるえ ふるえ 西高 甲府西高



甲府西高等学校
Kofu Nishi High School







発行
甲府西高新聞部
〒400-0064
甲府市下飯田4-1-1
Tell 055-228-5161(代)
Fax 055-228-5164

120周年誌号

120周年記念誌特別特集 「愛の道を駆け抜けた」小川正子



小川正子

(笛吹市春日居郷土館・小川正子記念館所蔵)

小川正子の生涯

医師になるまでの正子

明治三十五年、小川正子は現在の春日居町で誕生した。父の清貴は製糸工場を営する名士で、また母のくには、お茶の水女子大学の前身である東京女子高等師範学校を卒業している。そのような経緯から、正子自身も幼少

期から英才教育を受けていたという。また、幼いころから男勝りな性格であったらしく、その後の精力的な医療活動を鑑みると、このような性格がその原点だったといえるだろう。

その後、山梨県立高等女学校（本校の前身）を卒業し、また大正十年には、後に衆議院議長となる樋貝詮三と結婚することになる。しかし、家庭の不和や、自ら望んでの結婚でなかったこともあり、およそ二年後に離婚してしまう。そして、経済的に自立して生きていくことを選んだ正子は、東京女子医学専門学校（現在の東京女子医科大学）に入學し、医療の道に進むことを

ハンセン病との出会い

昭和四年、専門学校に在学中の正子は人生の転機を迎える。その年にハンセン病療養所の一つである多磨全生園を訪れた際に、後の上司となる光田健輔と出会う。光田は「救らいの父」と呼ばれ、ハンセン病治療の第一人者であり、正子は彼の話を聞いたことがきっかけでハンセン病治療の道を決意する。

その後、ハンセン病治療に携わる決意をした正子だが、親族の猛烈な反対に直面することとなった。当時、ハンセン病は一般的に誤った認識が広がっており、正子がハンセン病に罹患することを恐れた親族が、何とかして思いとどまらせようと説得しようとした。

昭和七年、正式に愛生園で採用され、本格的に治療に関わっていくこととなった。

時代であったが、実際にはその大部分が家計補助的な女性たちであり、そういった意味では経済的な自立を目指した正子は、とても先進的な存在であったといえる。



小川正子の生家

長島愛生園での正子

正子が行った医療活動は、正子が残した手記がもととなっていて、著書「小島の春」にまとめられているが、精神的にも物理的にも大変な重労働だったといえる。というのも、愛生園での仕事は、その施設に入所している患者の看病だけではなく、ハンセン病に罹患していると思われる人を直接訪ねて、検査を行ったうえで愛生園へ来るように説得する、「検診」というものがあつたそう。その際に、患者によっては山中の集落などの行くことが困難な場所に赴く必要があつた。車が使えない道を数時間かけて歩くようなこともあつたという。また、精神的には、罹患者を説得する際に困難を強いられたそう。既述のように、当時、ハンセン病は治療で

きないなどといった誤った認識が一般的に広がっていたため、罹患者の親族が愛生園への移送に強く反対してくることもあつたという。こうした過酷な環境でも正子はハンセン病治療に従事し続けたのは、ひとえに彼女の崇高な志と精神力があつたからだといえる。ま

た、著書「小島の春」の中でも出てくるが、彼女の活動の根底には「愛生園という楽園を作り、ハンセン病の罹患者にも幸せに暮らしてほしい」という強い慈悲の精神があつたようにも感じられる。

生きてゆく日に

愛と正義の十字路に立たば

必ず愛の道に就け

愛生園を拠点に精力的に活動していた正子は、その後過酷な労働がたたり、病魔に冒されてしまう。昭和

十二年のことであつた。正子は結核を発症してしまい、結果的に山梨の生家で療養することになる。その後の

伏期間が長く、平均して三年から四年、中には十年から二十年以上もたつてから症状の現れる人もいる。潜伏期間が長いため、結婚して家庭を築き上げた頃に発症することもあり、家庭に与える悲惨さはとても大

闘病生活は昭和十八年まで続くこととなるが、この間に正子の著書である「小島の春」が映画化されるなど、自ら活動できなくなつてなお、ハンセン病治療に貢献しており、その点からも彼女の偉大さが感じられる。



正子が晩年に書いた日記

小川正子の人生

希望の園石碑より

明治三十五年（一九〇二）

三月二十六日山梨県東山梨郡春日居村に生れる

大正七年（一九一八）

山梨県立高等女学校（甲府高女）卒業

昭和四年（一九二九）

東京女子医学専門学校卒業

昭和七年（一九三二）

一生を救済活動に捧げることを決意国立療養所長島愛生園に就任以後同療養所で患者の治療に当たるが、当時不治の業病として世間から隠され逆境に追いつめられていた癩病（ハンセン病）患者を愛生園に収容する活動に献身する

昭和十三年（一九三八）

四国、中国地方を初め瀬戸内の島々の患者の家を訪ね、検診や入園勧誘のさまをつづり叙情豊かな「小島の春」として発刊、この書は数十万の読者にハンセン病に対する認識を改めさせ患者と家族に光明をもたらした映画化もされる

昭和十八年（一九四三）

四月二十九日肺結核のため四十一歳で没す

初期の相手である有泉馨海軍軍医大尉を一目見たかっただけという理由の一つであつたよう。そのころ、

大尉はちょうど帰港していたため、正子は初恋の相手との再会を果たした。また、同級生と共に用意した国旗

ハンセン病とは

伏期間が長く、平均して三年から四年、中には十年から二十年以上もたつてから症状の現れる人もいる。潜伏期間が長いため、結婚して家庭を築き上げた頃に発症することもあり、家庭に与える悲惨さはとても大

普通は皮膚の外傷が感染の始まりである。一般に最初に現れる症状は、刺激への感覚が悪くなることや、斑紋など。重くなると眉毛、頭髮が抜け、視力障害や手足に結節（こぶ）ができ、斑紋からは膿が出てくる。そして栄養失調をおこし、体が衰弱して、死に至るのである。感染力は極めて弱いものだが、感染から発病までの潜

きいものがあつた。かつては不治の病とされてきたこの病気も、「プロミン」という薬の発見により治療が飛躍的に進歩し、現在では医療や医療の進歩によって治る病気になるっている。



小川正子記念碑

現代に残る 小川正子の軌跡

正子と甲府西高校

本校の中庭には小川正子記念碑が設置されている。この碑は甲府二高であった昭和三十一年に二高PTAと同窓会、山梨県医師会が企画して作られたものだ。安山岩でできており、碑面には正子の短歌「夫と妻が親とその子が生き別れる悲しき病世に無からしめ」の文字が刻まれている。除幕式は正子の命日である四月二十九日に執り行われた。

式の後には体育館で記念講演会が正子の同級生などによって行われ、書道教室では遺品展が開かれた。

令和三年の鳳凰祭では三年生の劇で小川正子を取り上げたクラスがあった。生物の授業でハンセン病についての知識を得て、全校生徒に伝えたいと考えたため企画したそうだ。今では隔離政策による差別への批判もあるが、感染症の拡大を防ぎたいという彼女なりの使命感のもと行動していた姿を表現した内容であった。

また、ハンセン病治療に従事した功績から、昭和五十九年に春日居町から名誉市民の称号を贈られている。さらに春日居町には正子の詠んだ短歌が、歌碑(石碑)として残されている。昭和十九年に、同級生により「仏念寺」に建てられた碑がその起源だというのが、記念館が設立されてからは、春日居町の町おこしの一環としても活かされている。現在は、春日居町駅を始め、五カ所に歌碑が建てられている。

正子の座右の銘とは

新聞部は、令和三年に発行した定期新聞二一四号で小川正子の姪にあたる吉原五鈴子さんにインタビューを行った。吉原さんは、以前中学校校長をされていた方で、小川正子の生き様を講演会などを通して広める活動もされてきたという。

吉原さんは「正子の座右の銘であった『生きてゆく日に愛と正義の十字路に立たば必ず愛の道に就け』というのには、正論ばかりを通そうとする世の中ではギスギスしてしまう。そこに温かい思いやりや相手の

最後に

全体を通して四十一年間というあまりに短い生涯を送った小川正子。当時のハンセン病治療については、そもそも対処方法が誤っていたのではないかと、などといった論説を見かけることも多々ある。確かに、科学的に考えるとより良い方策があり、当時の活動は今考えれば最善のものではなかったのかもしれない。

一方、正子がハンセン病患者の幸せを一途に思い続けていたことや、自らの命を削りながら活動に従事していたこともまた事実である。

立場に立つことが大切だということ、身をもって示してくれたのが正子であったと思います。そうでなければ、ハンセン病の活動はできなかったのではないのでしょうか。コロナ対策において偏見や誹謗中傷がソーシャルネットワークサービなどで飛び交ったりしていますが、そのせいで自分の将来を控えてしまう人が出ることはとても残念です。人として当然のこと、平等な思いを再確認するためにも、ぜひ『小島の春』を読んでみてください」と話された。

編集後記

令和三年に発行した二一四号からさらに取材を深め、小川正子の生涯についてをまとめさせていただいた。卒業生としてもう一度新聞の編集作業をしてみて、高校生だった頃の自分を振り返り、充実していた西高生活を思い出す機会となった。

この記事を仕上げるにあたり、小川正子記念館様には多大なるご協力を賜りましたことを御礼申し上げます。

甲府高等女学校卒業の 先輩から伺ったこぼれ話

▼1942年に始まった甲府高女での生活は、多感な少女たちに日々の大切さと平和の尊さを感じさせるものであった。▼大東亜戦争が開戦し、様々な物資が制限された。制服はセーラーなら何でも良いとされた。革靴や腕時計を身につけることは禁止され、万年筆の使用も不可となった。そのため、教室ではみんなで赤い鼻緒を作り、白木の下駄で通学した。▼しかし、ダメと言われるとやりたくなるのが青年期の若者である。少女は腕時計をして行ったり、観てはいけないとされていた映画に母と出かけた。▼秋になると強歩大会が行われた。学校と早川橋を往復するコースである。少女は学校を出て千秋橋から浅原橋までずっと走り続けた。鰍沢の検印所を通過し、富士川沿いを歩き進んでいると月見橋のあたりで三年生の一位の先輩とすれ違い、先輩の速さにとても驚く。その後、早川橋の石の上でおにぎりを食べ、歩く気持ちが悪くなったためリタイヤし、バスで学校まで戻った。▼三年生になると授業はなくなり、学徒動員が始まった。他学年の生徒は工場などでの立ち仕事であったが、少女の学年は東京から疎開してきた貯金局の仕事であった。二



還暦の記念に文化ホールに記念碑を建て、ハナミズキを植樹した。(甲女四十二回生)



か月間の準備教育を受けたものの、少女たちはそろばんを使った利子計算などに不安を覚えつつ、一生懸命に勤労した。▼甲府空襲によって校舎は全焼してしまった。授業は県内数か所(穴切・花鳥・右左口・上野・押原・敷島・韮崎・日野春)に分かれ、甲府では穴切小学校にて床に座る形式で行われた。終戦時には疎開してきていた生徒の分で二クラス増えた。卒業式は焼け残った甲府工業で行われ、久しぶりに全員集まることができ、とても嬉しいことであった。▼戦争の影響を大きく受けた学生生活。食べ物や着るものが限られた中でも、学友と会うことの楽しさを感じた少女時代の思い出は今も鮮明に思い出される。

甲府二高で学んだこと



甲府西高校同窓会顧問
坂本悦子

甲府二高15回(昭和38年)卒

PROFILE

昭和42年 山梨県高等学校社会科教員採用
平成7年 県立高校初の女性管理職
山梨県教育委員会生涯学習課・
山梨県教育委員会高校教育課
山梨県教育委員会高校教育課
公民科指導主事
平成10年 甲府東高校教頭
ふじざくら支援学校校長
甲府南高校校長
甲府南高校校長退職
平成17年 甲府南高校校長退職
平成29年 甲府西高校同窓会会長

私は昭和三十五年四月、甲府二高へ入学しました。姉二人とも甲府二高の卒業生でしたので、他の高校への選択肢は全くありませんでした。その上、甲府二高の正門から東へ百メートルほどのところに家がありましたので、チャイムが鳴つてからでも間に合いそうな距離でした。

甲府二高に入学して、当時は全県一区だったのでしようか、遠くから通学している人もいました。担任の先生からこんな近くに住んでいるのだから、学校のために働くように言われ、二年生からは生徒会本部役員となりました。授業が終わると生徒会本部室に直行していました。高校二年間、生徒会本部役員をして他のクラブ活動には入部することはできませんでした。

当時甲府二高は文武両道に優れていました。総合体育大会で優勝し、緑が丘総合グラウンドから学校まで、優勝旗を持って行進しました。大変誇らしい行進でした。在学中に六十周年記念式典を経験しました。

学園祭は大変活発で、特に印象深く残っているのは、先生方が演劇をして私共生徒に見せてくださったことです。それも大変立派な、本格的な演劇だったように覚えております。

進路を決めるときは、兄弟の末っ子でしたので、県内の大学ということで山梨大学学芸学部中学校課程社会科に入学しました。四年間の大学生活の後、山梨県の教員試験を受け、高校の教員となりました。新採用は甲府二高となりました。四年後でしたので、高校生の時教えていただいた先生方も多くいらつしやり、緊張した日々を送ったのを覚えています。生徒として通学した学校のたたずまいと

変わらず、木造校舎は懐かしいものでした。新採用教員として、皆さんに大事にしてくださいました。高校三年間は女学校でしたので、どんなことも女性で対応していました。高校生としての三年間、そして新採用教員としての経験で、女性だから、という考え方をしない、一人の人間として事に当たるという考え方を養ったように思います。

遠隔地要員として吉田商業高校に四年間勤務し、再び甲府二高に勤務することになりました。甲府二高から甲府西高に変わる時でした。女学校から男女共学となり、制服をどうするか、校歌をどうするかなどいろいろな委員会が作られて検討しました。八ヶ岳寮にも男子棟が作られました。甲府二高の校舎からの引越しの最後の夜、先生方全員が肩を組み校歌を歌って校舎にお別れしたの思い出します。

個人的には吉田で一人、戻って二人の子供を出産しました。三人の娘の母親となり、なりふり構わず子育てと学校の仕事をこなしてきました。どんな風にしていったのか、今思うと恥ずかしい限りです。

母校を思うと甲府高女から甲府二高、甲府西高と脈々と受け継がれているのは、ゆつたりとした大河の流れのような、穏やかな精神の中に端然とした毅然とした力強さです。高校三年間という多感な時期に身についた精神は、私の生涯の軸となったと思っています。現在の高校生にも是非身につけていただきたいと思います。

百二十年という歴史は多くの同窓生と在校生の母校愛に支えられて作られたものだと考えます。これからも永遠に続いてほしいと願っています。